

# 新中間層における新婚旅行の普及

## The Spread of Honeymoon in The New Middle Class

森 津 千 尋

本稿では、婦人雑誌における新婚旅行記事を資料として、大正から昭和初期にかけての新中間層における新婚旅行の普及について検討を行った。新中間層が主な読者層とされる婦人雑誌においては、まず理念的な新婚旅行の提唱や検討から始まり、次第に実践を前提とした具体的なアドバイスや携帯品の紹介等の実用記事へと内容が変化していく。そして著名人や読者の新婚旅行体験記が掲載されるようになり、新婚旅行はいくつかの誤解や失敗がありつつも「よい思い出」として語られることで、肯定的に再生産されていく。このように婦人雑誌で取り上げられるようになり、明治後期にはまだ「憧れ」であった新婚旅行は、大正末期から昭和初期にかけて新中間層の間で普及し、婚礼儀式の一部として実践されていく。そしてその結果、この時期には、同じ場所へ同じスタイルの新婚旅行夫婦を運ぶ「新婚列車」が登場し、新婚旅行の大衆化・画一化がさらに進んでいく。

キーワード：新婚旅行 新中間層 婦人雑誌 新婚列車

### 目 次

はじめに

I 新中間層と婦人雑誌

II 婦人雑誌における新婚旅行記事

III 「新婚列車」の登場

おわりに

---

### はじめに

日本において、「新婚旅行」「ハネムーン」という言葉が使われだしたのは明治中期以降であり、当初は西洋起源の婚礼儀式の一つとして、華族や富裕層を中心に受け入れられていく。こうした上流

階級による「新婚旅行」の実践は新聞記事で取り上げられ、さらに当時広がりだした家庭小説の中にも登場するようになる。例えば徳富蘆花の『不如帰』(M31)では、その悲劇的結末とは対照的に、物語の冒頭では主人公夫婦の「温かく」「幸せ」な新婚旅行の様子が描写されており、またその他の家庭小説でも、新婚旅行は結婚生活の出発点と位置づけられ、家庭の基盤である「夫婦の絆」を結ぶ旅として描かれる。このように明治後期から大正期にかけて、まずは新聞・雑誌に新婚旅行が登場しその理念が受容された後、結婚準備を紹介する「結婚指南書」等において、婚礼の一部として新婚旅行が組み込まれていく(森津 2016)。

では、メディアを通して新婚旅行の理念を受け入れ、実践していったのはどのような層の人たちであったのか。上流階級の生活様式や風俗は、その下の階層が憧れ模倣していくものだが、新婚旅行を描いた家庭小説も、新中間層を讀者とする婦人雑誌に掲載されることが多かった。

当時、相次いで創刊された婦人雑誌では、家庭小説の他にも、あるべき家族像や生活像についての論説や、具体的な生活様式や家事技術等の記事が掲載されていた。そこには生活や家庭への関心が共通して存在しており、またそれは明治中頃の家庭(ホーム)論に比べ、より具体的な内容であった(小山 1999:48)。このように夫婦を基盤とした家庭生活への関心が高かった新中間層にとって、新婚旅行は上流階級の模倣というだけでなく、理想の家庭(ホーム)像を目指す上で重要な儀式と捉えられたのではないだろうか。本稿では、大正・昭和初期の婦人雑誌に掲載された新婚旅行記事を通して、新中間層の間でどのような新婚旅行の受容と実践があり、またそれが持つ意味について検討を行う。

## I 新中間層と婦人雑誌

日露戦争後、産業化の進展に伴い都市部への人口集中がはじまる。さらに第一次世界大戦後、国内生産の加速化により多くの工場労働者が生まれ、その上にたつ頭脳労働者が求められることで、新中間層が誕生する(小山 1999:37)。新中間層は俸給を家計の柱とするが、出身や学歴によって分けられた一握りのエリート層と膨大な非エリート層で編成されており、その再生産の仕組みが学歴という原理に基づいていたため、その家庭においては教育志向が強かった(中村 2000:62)。

この新中間層の増加と女子教育の充実を背景に、大正期には多くの婦人雑誌が創刊される(前田 2001:217)。そして、大正中期には有力雑誌の再編がおこり、『婦女界』(M43 創刊)など明治期に創刊された雑誌の人氣が衰えはじめ、それにかわり大正期に創刊した『主婦之友』(T6 創刊)『婦人公論』(T5 創刊)『婦人倶楽部』(T9 創刊)の3誌が発行部数を伸ばしていく(永嶺 1997:187)。特に発行部数が多かったのは『主婦之友』で、大正6年の創刊当時の発行部数は1万部程度だったが、大正13年頃には23～24万部となり、また他の大手婦人雑誌も10万の桁の発行部数を擁すなど、婦人雑誌市場は急激に発展していった(前田 2001:217)。

これら婦人雑誌の主な読者は、新中間層の主婦であったとされている。ただし永嶺は、大衆路線の『主婦之友』『婦人倶楽部』については女工など幅広い層にも読まれていたと指摘しており、大正後期以降、婦人雑誌の購読習慣はより下層の特に若い女性へと波及し「大衆女性によるエリート女性文化の一種の模倣」があったと指摘する（永嶺 1997:182）。このように、大衆志向型の『主婦之友』『婦人倶楽部』は、主婦および主婦になる準備段階の女性を中心に、中流以下にも読者層を拡大させながら、昭和期にはさらに発行部数を伸ばしていく（木村 2010:56）。他方そうした大衆化に反発し、インテリ志向となっていったのが『婦人公論』であった。『婦人公論』の読者は職業婦人や女学生と偏りがあったため大衆型婦人雑誌に比べて部数が伸び悩み、その結果『婦人公論』は徐々に「高級」路線の大幅な修正を余儀なくされていく（永嶺 1997:187）。

## II 婦人雑誌における新婚旅行記事

明治中期から大正初期まで、メディアに登場する新婚旅行は、事件や著名人の新婚旅行を報じる新聞記事、もしくは家庭小説などの創作物が中心であった（森津 2016）。しかし大正中期中に入ると、婦人雑誌の記事の中にも新婚旅行が登場するようになる。記事内容は、大正末期頃までは新婚旅行の是非を問うものが中心だが、徐々に、どこに行くのがよいか、どのような準備が必要かなど、読者が新婚旅行に行くことを前提とした実践的アドバイスへと変化していく。またそれと並行し、著名人や読者の体験として新婚旅行の思い出や失敗が語られる「新婚旅行体験記」が掲載されるようになる。

### 1 新婚旅行は可か否か

雑誌における新婚旅行記事は、新婚旅行に行くことの是非を問う議論から始まる。このような議論は婦人雑誌以外の雑誌でも掲載されており、大正末期頃には社会の中で新婚旅行が婚礼の一部として認識されつつあったことが伺える。

昭和1年1月号の『主婦之友』では、「結婚といへば、新婚旅行は必ず付きものゝやうに考えられてゐます。そしてこれは盛んになつてゆく傾向があります。（中略）然し歓楽の裏には、必ずそれに伴ふ幾多の弊害があります。これほど盛んになつた新婚旅行に、絶対に反対をなさるお方の少ないのも、決して理由のないことではありません」として、「新婚旅行は必要か不必要か」それぞれ識者の意見を掲載している。この他、大正15年11月号『婦人倶楽部』でも「新婚旅行は果たして良い事か否か」というタイトルで、医師や教育家等10名の意見を掲載している。ここでは、これら2つの記事を中心に、新婚旅行肯定・否定意見について整理し、それぞれの背景となっている結婚・夫婦に対する考え方について検討していく。

## ① 新婚旅行肯定派の言説

### 夫婦の相互理解、相互扶助

新婚旅行に賛成とする人々の主な意見は、新婚旅行によって「夫婦の相互理解」が進み夫婦仲が良好になるというものである。山田わかば、新婚旅行は「相互の生活を纏める機会」とし、新婦が新郎の家に入る前に「誰に気がねをすることも無しに心のどかに語り合つて二人の心持ちを融和させて置くことはよいこと」と説く(『婦人倶楽部』T15.11月号)。

また文学博士の加藤玄知も、結婚は両親・媒酌人がよいという人と2、3回会ってするのが普通であり「他人同士の寄り合い」という気持ちが抜けないため、打ち解けられる体験として新婚旅行が必要だと主張する。そして、新婚旅行は「生きた修学旅行」「一つの訓練所」と捉えることができ、山登りなどの辛苦艱難を共にしながらも楽しみを求めるのがよいとする(『婦人倶楽部』T15.11月号)。

### 人生のよい思い出

また新婚旅行の体験は、多少の失敗があっても後の「よい思い出」になるという意見もある。中河幹子は「式後すぐに旅立つ新婚旅行は賛成」とし「一生のたのしい思い出として山水のいゝところへ行つてくる事、それは當人にとっていゝ事」だと述べる。また宮田多賀子も、これからの長い結婚生活ではお互いに気まずい思いや誤解もあるだろうが、その際にも、新婚旅行の思い出は「氷の様にかたくとちている心の上に温かい春の泡沫を吹きかけて温め和らげてくれる」ものになるとして、新婚旅行を薦める(『婦人倶楽部』T15.11月号)。

さらに教育者の三輪田元道は「宴会費を節約しても新婚旅行はせよ」と主張する。三輪田は、旅は「ほんとうの人間を作る絶好の機会」と考えており、新婚旅行は女中など連れず「必ず夫婦二人でいくべき」で、「不自由なことや、赤面するような失策があつてこそ、旅行に意義」があると説く。そしてそれは「どんな場合にも彼らの胸に懐かしく蘇」える「快い思い出」になると述べる(『主婦之友』S1年1月号)。

以上のように、新婚旅行肯定派の主張は、見合い結婚等で新婚夫婦が互いをよく知らないことを前提としながらも、新婚旅行に行くことで互いの「理解」や「助け合い」が生まれ、それが夫婦の基盤となり、その後の結婚生活でも「よい思い出」となるというものであった。ノッターは、日本の大正期には、互いに理解し「情熱的」というよりは「温かい」夫婦愛が特徴である「友愛結婚」が生まれたと指摘するが、新婚旅行肯定派の意見においても、「恋愛結婚」でなくとも結婚後は互いの人格を尊重し支えあう夫婦が理想とされており、「友愛結婚」型の夫婦像が示されていた。(ノッター2007:84)。

## ② 新婚旅行派否定の言説

### 身体・精神的負担

他方、新婚旅行否定派からは、新婚旅行は心理的肉体的負担が大きという意見があがる。医師

の森田正馬は、新婚旅行では新婚夫婦の「動物的本能に対する自制心」が解放され、その結果、心理上及び生理上に悪影響を及ぼすため、「新婚旅行は家庭生活の第一歩を誤る」と主張する（『主婦之友』S1年7月号）。

また大正5年5月号『新公論』では同年4月発行の『女学世界』の記事を引用する形で、新婚旅行の弊害について主張する。ここでは、汽車に乗り名所見物による疲労、また生殖器や消化機能の障害により、「喜悦と満足とに満たされ旅立ちし活き活きとした健康の新婦を面やつれ色蒼白めたる病婦となつて帰ることは稀ではなく」、ひどい場合はその後の流産や不妊にもつながると警鐘をならす。このような新婦の身体的負担についての注意は、同時期に出版された医師による「家庭医学書」や「夫婦読本」などでも見受けられる。

### 西洋人の風習の模倣

さらに否定派からは、新婚旅行は恋愛を基調とした欧米の風習のため、家制度を基調としている日本の結婚にはそぐわないという意見もあがる。医師の高峰博は、西洋人は「結婚以前に互いによく知り合ひ、交際し合っているのが多い」が、日本では「形式的の見合いだけだったり、又はほんの一二月の形式交際ですぐ様に結婚式」となる場合が多く、互いにまだ不慣れなため、新婚旅行は楽しいものとはならないと主張する（『婦人倶楽部』T15.11月号）。

さらに紀平正美は、挙式後「一度先づ家に入ろうともせず、式場より直ちに旅行するが如きは、面白からざる西洋の個人主義の模倣に過ぎず、人倫関係を主とする日本人の断じて為すべきことにあらず」と反対する（『婦人倶楽部』T15.11月号）。

また川村理助は、新婚旅行は「してもよしせずともよし」としながら、新婚旅行で夫婦仲がよくなったために「新婦の他の家族に対する情愛は成長せず寧ろ薄く」なり、それは「我が国の如き家族制度の国では甚だ面白くない」とみられる場合があるため、「家例典型の嚴重に保存せられて居る家庭」においては、無理にそれを破ってまで新婚旅行をすることはないとする（『婦人倶楽部』T15.11月号）。

以上のように、否定派は、まだ互いによく知らぬうちに旅行に行っても気疲れするだけで意味がないというものや、仮に新婚旅行で夫婦仲がよくなったとしても、それは他の家族を蔑ろにすることにつながり好ましくないと主張する。肯定派が「友愛結婚」を理想としているのに対し、否定派の主張には家制度を基本とした従来からの結婚に対する考え方が反映されており、この時期、結婚に対し両方の考え方が存在していたことがわかる。

また肯定・否定意見ともに共通してみられたのは、新婚旅行が日本の婚礼儀式の一部として広まりつつあるという認識である。そのため、否定派においても、全く認めないというものばかりでなく、新婚旅行に行く場合は、式後少し日にちを置き、浪費せず、また家族へ配慮する等、注意すべきことを中心に説くものもあった。このような否定派の意見は、その後、新婚旅行に行く際の「心得」として取り入れられるようになっていく。

## 2 「新婚旅行案内」記事

昭和に入り、婦人雑誌における新婚旅行記事は、「行くべきか否か」を問うものから「新婚旅行に行く」ことを前提とした内容へと変化していく。そして具体的に、新婚旅行はどこに行くべきか、携帯品は何か必要か、また新婦はどう振る舞うべきか等のアドバイスが掲載される。ここでは、婦人雑誌のなかでも大衆志向型とされた『主婦之友』とインテリ志向型とされた『婦人公論』の「新婚旅行案内」を取り上げ、その記事内容を整理しながら両誌における新婚旅行の位置づけについて検討する。

### ①『主婦之友』の新婚旅行心得

昭和5年2月号では、「新婚旅行をする花嫁の心得一切」というタイトルで、結婚を控えた女性が女性医師に相談する形式の記事が掲載される。ここではまず、新婚旅行先は「箱根とか熱海とか誰でも行く」ところではなく、人の少ない静かな田舎の温泉が勧められ、「虚栄や體裁を飾る」ために新婚旅行はするものではないと論される。また新婚旅行は月経日より後がよいなど、具体的に新婦の身体や衛生面についてもアドバイスする。相談女性は「婚約してから、二三度逢っただけでせう、何ですか気づまりな旅行のやうな気がします」と心配するが、医師は「どこまでも二人が一つのものになりきるやうに努力する準備を、この機会にいたすことですね」と励まし相談はおわる。

さらに昭和6年10月号では、村田実と夏川静江が新婚夫婦を演じる写真とともに「新婚旅行の心得」が掲載される。旅行中、新婦は化粧崩れに注意すること、夫の世話は女中に任せず新婦がすること、翌朝は夫より先に起きて身支度をすること、静かに二人で語り合う機会を多くすること、両方の親に便りを書くなど、14の「新婦の心得」が解説される。

そして昭和12年新年号でも「お式から新婚旅行までの御婚禮実演畫報」という付録の中で、「新婚旅行をする時の花嫁さんの心得」が10頁にわたり掲載される。新婚旅行先は汽車で三四時間程の「平凡な場所」がよく、携帯品は着替えの他30数品があげられ、化粧品の小分けの仕方やベンジンでの汚れ落としなど具体的な方法や準備が解説される。また先の記事同様、「花嫁さんの心得」として、夫の身の回りの世話、宿の人への心付け、両親への便り、さらに大げさなご馳走やお土産の買はずぎに注意し、経済的な新婚旅行にするよう指南される。

以上のように『主婦之友』では、かなり詳細な「新婚旅行心得」が掲載されるが、そもそも『主婦之友』は他の頁でも実際の生活に役立つ実用記事が中心であり、平易で親しみやすい誌面づくりが行われていたため、新婚旅行記事も同様の方針で編集されたと推測できる(木村2010:55)。また記事では、新婦自身のことはもちろん、夫や家族親戚への気配り、家計管理と多くの「新婦心得」が示され、そこには先にみた新婚旅行否定派の主張が反映されており、家制度を基調とした結婚に対する「配慮」が伺える。しかし一方では、新婦は夫への警戒心を解き、できるだけ夫婦二人で語り合う機会を多くすることも勧められ「友愛結婚」を思わせるアドバイスもしている。木村は、『主婦之友』が示す女性は「幸福な家庭の明朗活発な主婦像」と「儒教的良妻賢母像」という2重構造をもっているこ

とを指摘しているが、新婚旅行記事においても新婦に対して2つの理想像が存在していたことが考えられる（木村 2010:69）。

## ②『婦人公論』の新婚旅行ガイド

一方『婦人公論』でも「新婚旅行ガイド」記事が掲載されている。昭和5年10月号では「新婚旅行の美容」という内容で、携帯すべき化粧品、それぞれ汽車の中、ホテル、温泉場における化粧直しについて解説している。そして翌年4月号では「結婚式の後には必ず新婚旅行はしたいものです、あの甘やかな思い出の数々は、お互いの白髪頭を忽ち十年、二十年の昔に返す程の魅力を持っています。そして年老いた路辺の物語に若かりし情熱を忍ぶよすがともなりませう」と「春の新婚旅行地案内」を掲載する。誌面では「熱海はあまりに平凡」なため、日光湯本、松島遊覧、富士五湖めぐり、瀬戸内海めぐり、雲仙と幅広い新婚旅行コースが紹介され、宿はできるだけホテルがよいとアドバイスする。そして「たいていの中産階級は時間と経済の余裕」がないため、現代的で便利な新婚旅行が好ましく、ジャパン・ツーリスト・ビューローが発売するクーポン式遊覧券の利用を推奨する。

また昭和10年10月号でも新婚旅行に携帯する商品が紹介されるが、そこでは、新婚旅行は「一生に一度の記念すべき事業」であるため、多少高価であっても外国製の旅行鞆や化粧箱の購入を勧める。そして「新婚旅行を恋愛の延長」とするために香水は必須であり、「新婚用」で「センシュアルな刺激」のあるフランス製の香水を紹介する。さらに昭和11年5月号「新婚旅行のお支度」でも、宿はホテルを利用することを前提に、アフタヌンドレス、イブニングドレスなどの洋装の支度が解説される。

以上のように、『婦人公論』の「新婚旅行案内」記事では、平凡ではない場所への合理的な旅が推奨され、新婦の持物は外国製の高級品が勧められる。一方『主婦之友』でみられた「新婦の心得」のようなアドバイスは一切登場しない。これは、インテリ志向、高級志向の『婦人公論』の特徴を反映しており、特にこの時期『婦人公論』で頻繁に登場していた「モダンガール」スタイルの新婚旅行ガイドであったといえる（木村 2010:70）。

ここまで『主婦之友』と『婦人公論』の「新婚旅行案内」記事を見てきたが、両雑誌の記事内容は大きく異なっていた。紹介する旅の目的地や携帯品の違いはもちろんあるが、『主婦之友』では、夫との信頼関係の構築や家族等周りへの気遣いについて具体的かつ詳細に指南しており、一方『婦人公論』では新婦のファッションやスタイルに焦点をあて、夫婦が合理的かつスマートに新婚旅行を楽しむ方法が紹介されていた。これは『主婦之友』では新婚旅行を「家庭生活の始まり」と位置づけているのに対し、『婦人公論』では新婚旅行は「恋愛の延長」と捉えており、両誌における新婚旅行の捉え方の違いを示しているといえる。

### 3 新婚旅行の体験記

昭和にはいると「新婚旅行案内」とともに「新婚旅行体験記」記事も増えてくる。読者の体験談は大正期にもいくつか掲載されているが、当初は目的地や行き方の説明、その過程での新婦の喜び不安などを日記風に綴ったものが主流であった。例えば、大正15年2月号『主婦之友』「新婚旅行の思い出日記」では、長年胸に秘めた恋の成就に喜びすすり泣いたというものや、新婚旅行は和歌山へいき夫婦ともに蜜柑が好きで打ち解けた話などが掲載され、いずれも最後は、これから新しい生活を始めるにあたり、夫婦二人が信じあっていく決意で締めくくられる。

しかし、その後「新婚旅行体験記」は、夫婦が互いにまだ不慣れなために起こった誤解や、周囲への迷惑などの「失敗談」が中心となっていく。昭和9年9月号『主婦之友』「新婚旅行の失敗談」では著名人のエピソードが掲載されるが、片岡我當は夫婦二人きりになるためこっそり外出して家族を心配させた話、また高石勝男夫妻は、旅館の女中に親子に間違えられたことなどを語っている。さらに同誌昭和11年5月号でも、志村立美夫妻は新婦が夫と間違い他の男性に声をかけ赤面したこと、奥田良三夫妻は新婦が熱をだした話など、失敗や恥ずかしかったことが「懐かしい思い出」として語られる。

また著名人だけでなく読者の新婚旅行「失敗談」も掲載される。昭和11年12月号『婦人倶楽部』では「新婚旅行の縮尻話」が特集され、入浴中に夫と間違い別の男性をつねった話、夫の知人の妻を浮気相手と勘違いした話、手ぬぐいと間違い越中ふんどしを夫に渡した話が挿絵とともに掲載される。

以上のように、著名人でも読者でも、新婚旅行ではみな何か失敗や恥ずかしい経験をしており、そしてそれは懐かしく微笑ましい思い出として語られる。先の節で見たように、このような失敗を危惧して新婚旅行は反対され、また「新婚旅行案内」でも注意されてきたが、これら記事の中で「よい思い出」として語られることで、「新婚旅行での失敗」は肯定的に受け入れられていく。この時期には新婚旅行自体を否定する意見はほとんど見られなくなり、結婚したら新婚旅行は「行くべきもの」として定着していく。

## III 「新婚列車」の登場

前章でも見てきたように新中間層の間で新婚旅行が浸透していくなか、昭和10年頃には「新婚列車」が登場する。当時、東京から3～4時間で行ける熱海や伊豆・箱根は、旅行地としての開発も進み、新中間層にとって手頃な新婚旅行先となっていた。

新婚旅行に限らず、大正末期から昭和初期にかけては旅行の大衆化が進むが、これは交通網の伸展だけではなく、各観光協会の設立や名所旧跡の保存など旅行地の整備が進んだこと、さらにジャパン・ツーリスト・ビューローによる『旅程と費用概算』の発行、切符の代理販売開始など、旅の

合理化が進んだことも背景にある。赤井は、この時期の旅行スタイルは「山水の旅から趣味の旅へ」と変化し、団体旅行や新婚旅行、女性の一人旅など様々な旅の新形式が紹介されたと指摘している（赤井 2011:3）。

そして、旅の大衆化・多様化のなか、秋の大安の日、東京駅から熱海に向かう新婚客を乗せた列車を「新婚列車」と呼ぶようになっていく。昭和9年9月号『主婦之友』でも野球選手の若林忠志の新婚旅行エピソードの中で「新婚列車」は登場する。

僕等もやつぱり熱海へ行つたんですよ。ほら、九時何分からの『新婚列車』ついでいふ、あれでしてね。その日は大安てんですか、結婚式の當日日ですてね、七八組もいましたよ。盛大なもんですな。赤の他人みたいに、行儀よくしているのもあれば、喃々喋々あたりを憚らずついでにふ相當なものあり、一人々々をちつと眺めていると実に面白いんです。

このように昭和9年には、「新婚列車」は既によく知られたものとして話題にのぼり、また昭和10年12月号『婦人公論』「新婚列車同乗記」では、サトウハチローが11月3日の「新婚列車」の様子を記している。彼は漫画家の横山隆一とともに東京発熱海行き列車に乗り、車中の新婦の着物がみな菊の柄であるのを見て「秋の結婚にはすぐに菊ではあんまり能がない」と皮肉を言いながらも、「余は何故に一度も行わなかつたのであろう。悔やんでも悔やんでも悔やみきれない」と新婚旅行に向かう新婚夫婦をうらやむ。

この昭和10年11月3日は明治節で大安ということもあり、多くの結婚式がおこなわれたようで、翌日4日の『毎日新聞』（東京朝刊）でも「熱海行き新婚列車」というタイトルで、次のように新婚旅行客の賑わいが報じられている。

三日午後十時廿一分熱海駅着下り八二五列車で新婚十三組下車したのをトップに同十時廿二分着二、三等急行下り一五列車で廿八組、同十一時五分着二、三等急行下り五列車で廿組、常でも新婚列車といはれる同十一時廿一分着二、三等急行下り一七列車に至つては実に四十八組、都合百十九組か下車して熱海駅頭に絢爛な新婚旅行風景を描き出した

このように夜の10時過ぎから1時間少しの間で、百組を超える新婚客を運んだ「新婚列車」だが、これに同乗していた小説家の小寺菊子は、車中の新婚旅行客について「それは日本の中産階級一般インテリ大衆の代表的なもので、まことに御目出度く幸福にかつ将来も圓滿であるでせう」と述べている。また記者も「そういえばみな同じやうに花嫁廿二、三歳、花婿廿歳前後という年配で持物、衣装総てがそう無やみに上等でも下等でもない」と感想を述べ、先のサトウハチロー同様、新婚夫婦のスタイルがみな似通っていると指摘する。

ここで、前章で見た婦人雑誌との関係について考えてみたい。この時期にはすでに『主婦之友』や『婦

人公論』において、「新婚旅行案内」記事が掲載され、行先はもちろん服装や携帯品までが詳細かつ具体的に紹介されていた。そのため「新婚列車」で初めて新婚旅行に向かう新婦たちは、これら婦人雑誌、特に『主婦之友』の記事を参考にしたと推測することができる。というのも昭和9年の『主婦之友』発行部数は100万部を超えており、「女学校をでたら『主婦之友』で修養」というのが女学校や女学生をもつ家庭での認識となっていた(木村 2010:55)。『主婦之友』が提唱した新婚夫婦らしい明るさがありながら実用的かつ華美にならないスタイルが、一般的な新婚旅行の様式として定着するとともに、新婚旅行の大衆化そして画一化が進んでいったと考えられる。

## おわりに

今回は婦人雑誌の新婚旅行記事を通して、大正から昭和初期の新婚旅行の言説の変化について検討を行った。ここでその変化について整理を行うと、婦人雑誌における新婚旅行記事は、まず理念的な新婚旅行の提唱や検討から始まり、次第に実践を前提とした実用的準備・注意へと内容が変化していく。そして最後は、著名人また読者の体験談が掲載されるようになり、そこで旅行中の誤解や失敗も含め「よい思い出」として語られることで、新婚旅行は肯定的に再生産されていく。

このように大正末から昭和にかけ婦人雑誌で取り上げられることで、新婚旅行は新中間層の間で広がり婚礼様式の一部として実践されていく。これは新婚旅行の大衆化・画一化でもあり、同じ場所へ同じスタイルの新婚夫婦を運ぶ「新婚列車」がその象徴ともいえるだろう。

最後に、昭和11年1月号『実業の日本』の記事に触れておきたい。ここでは、当時の企業幹部や政治家、大学教授など52人の「名士」に「新婚旅行はどこへ行ったか」という質問をしているが、里帰りや赴任地へ向かう旅も含め「行った」のは16人で、3分の2以上が「行っていない」と答えている。その理由は、経済的また時間的な余裕がなかったというほかにも、「私の結婚当時は新婚旅行は流行りませんでした」(森永製菓社長)、「よほどの財産家か或いはよほどのハイカラでなければ新婚旅行などしなかった」(日本生命保険専務)、「新婚旅行が普通の習慣になったのは大正以後」(東京商大教授)と、「自分たちの時代にはなかった」という意見が目立つ。彼らは明治生まれで、新婚旅行という言葉は知っていても実際に行く人は少なかった世代であり、新婚旅行の実践と定着は、その後、新中間層にあたる彼らの子の世代で達成されていく。

新婚旅行は、旅の大衆・娯楽化またメディアの発展などの影響を受けながら、それぞれの時代や世代における家族や夫婦の在り方を映し出すものである。今回検討した大正・昭和初期を経て、日本社会が大きく変化していく戦中戦後期には、新婚夫婦はどこへ新婚旅行に行き、どのようなものとして位置づけられたのか、今後さらに研究を進めていきたい。

引用文献

- 赤井正二2011「趣味の旅行」と「モダンライフ」—大正・昭和前期における旅行文化の展開と旅行論—『立命館産業社会論集』46(4)
- 木村涼子2010『〈主婦〉の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館
- 小山静子1999『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房
- 坂井妙子1997『ウェディングドレスはなぜ白いのか』勁草書房
- 永嶺重敏1997『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部
- 中村牧子2000「新中間層の誕生」原純輔編『日本の階層システムⅠ 近代化と社会階層』東京大学出版会
- ノッター、デヴィッド2007『純潔の時代—近代家族と親密性の比較社会学』慶応大学出版
- 前田愛2001『近代読者の成立』岩波書店
- 牟田和恵1996『戦略としての家族』新曜社
- 森津千尋2016「明治後期における「新婚旅行」言説についての一考察」『宮崎公立大学人文学部紀要』24(1)宮崎公立大学

